

# 高校生を対象とした介護老人保健施設 体験プログラムによる介護人材確保の可能性

ひらめき☆ときめき サイエンス～ようこそ大学の研究室へ～  
KAKENHI（研究成果の社会還元・普及事業）を実施して

百 田 武 司・岡 田 淳 子・渡 邊 久 子・梶 川 咸 子・山 本 悦 子  
要 田 潤・吉 谷 裕 子・桑 原 亜 紀・上 田 美 季



## 【研究報告】

# 高校生を対象とした介護老人保健施設 体験プログラムによる介護人材確保の可能性

ひらめき☆ときめき サイエンス～ようこそ大学の研究室へ～

KAKENHI（研究成果の社会還元・普及事業）を実施して

百 田 武 司<sup>\*1</sup>, 岡 田 淳 子<sup>\*1</sup>, 渡 邊 久 子<sup>\*1</sup>, 梶 川 成 子<sup>\*2</sup>  
山 本 悦 子<sup>\*2</sup>, 要 田 潤<sup>\*2</sup>, 吉 谷 裕 子<sup>\*2</sup>, 桑 原 亜 紀<sup>\*2</sup>, 上 田 美 季<sup>\*2</sup>

## 【要 旨】

科学研究費補助金に基づく独立行政法人日本学術振興会の助成を得て、高校生を対象とした介護老人保健施設（以下、老健とする）体験プログラムを実施し、プログラム終了後に、参加者へ質問紙調査を実施した。その結果、本プログラムの内容について「理解できた」が90%以上あり、満足度の高いプログラムと考えられた。また、老健に「興味がわいた」が90%以上あり、将来老健で「働きたい」が70%以上であった。従って、老健体験のプログラムを高校生に提供することは、介護や老健への関心を引くことになり、進路選択の時期にある高校生にとって、介護分野を進路選択とすることを促進することに繋がり、介護人材確保の一助となるのではないかと考えた。

【キーワード】 高校生, 介護老人保健施設, 科学研究費補助金

## I はじめに

ひらめき☆ときめき サイエンス～ようこそ大学の研究室へ～ KAKENHI（研究成果の社会還元・普及事業）とは、独立行政法人日本学術振興会（以下、学振とする）の委託により、我が国の国公私立大学及び大学共同利用機関が実施するもので、学術と日常生活との関わりや学術がもつ意味に対する理解を深める機会を提供する。そして、我が国の将来を担う児童・生徒を対象として、その知的好奇心を刺激し、心の豊かさや知的創造性を育むことと、科学研究費補助金（以下、科研費とする）による研究成果をわかりやすく発信することを通じて、学術の文化的価値及び社会的重要性について示し、もって学術の振興を図ることに資することを目的としている。この事業の応募資格は、平成16～20年度の間に、科研費の研究代表者として研究を実施したことがある研究者が所属しているすべての機関である（独立行政法人日本学術振興会、2009）。筆者らは、研究課題「介護老人保健施設職員が受ける暴力被害の実態と被害者の体験に関する研究」（研究代表者：百田武司、平成20～21年度若手研究（B）課題番号

20791687）を基に、この事業に「『ろうけん』ってどんな所？リハビリ・看護・介護の魅力を探求しよう！」というプログラム名で応募したところ、採択され実施することができた。本稿では、このプログラムの実施状況を紹介し、プログラム終了後に実施した、参加者への質問紙調査結果を報告し、本プログラムによる介護人材確保の可能性について考察する。

## II プログラム実施の状況

### 1. プログラムのねらい

本研究課題は、介護老人保健施設（以下、老健とする）職員が受ける暴力被害の実態という、老健職員にとって負の部分をはっきりとさせるものである。しかしながら、本研究課題の最終的に目指すところは、老健職員が受ける暴力被害という問題を克服し、老健職員が働きやすい環境を整えていく方策をたて、老健がより魅力ある職場となることである。そのため、本プログラムのねらいは、参加する高校生が、老健の世界を知り、実際にみて、体験して、老健が高齢者にどのような効果をもたらしているのか、そして、リハビリテーション・看護・介護の魅力を探

\*1 日本赤十字広島看護大学 \*2 介護老人保健施設ひばり



求することであった。

## 2. プログラム実施の状況

2009年9月12日に、日本赤十字広島看護大学（以下、本学とする）と、広島市中区の介護老人保健施設ひばり（以下、老健ひばりとする）を会場に実施した。参加者は、高校生14名であった。本プログラムの実施には、本学の教員3名と老健の専門職6名（施設長兼医師、看護師兼介護支援専門員、支援相談員、理学療法士、管理栄養士、介護福祉士各1名ずつ）の他、実施協力者として本学の学部2～4年生の4名が関わった。さらに、当日の事務担当者として、本学事務局より2名が関わった。その他、「老健」(全国老人保健施設協会機関誌)と「リハビリナース」(メディカ出版)の雑誌2誌の取材があり、記者2名の同行取材があった（老健編集部，2009；リハビリナース編集部，2009）。

当日のプログラムの内容は、次の通りである。

### 1) 本学におけるプログラム内容 (1)

まず、「『ろうけん＝介護老人保健施設』ってどんな所？」と題した講義を行った。内容は、老年期の身体・精神機能の変化、特に嚥下障害や認知症についてと、老健とはどのようなところか、介護保険制度や施設の成り立ち、老健の機能について説明した。また、本研究課題で行っている、老健職員が受ける暴力被害の実態について、筆者が行った全国調査の結果の概略を説明した。

次に、体育館に移動し、高齢者疑似体験の演習を

行った。内容は、高齢者疑似体験装置を着用し、ベッドや床へのトランスファーや座位・立位動作、階段昇降等を参加者が体験した。この演習を通して、高校生が、老健利用者である高齢者の身体変化について体験し、考える機会を設けた。

### 2) 老健ひばりにおけるプログラム内容

次に、バスで広島市内の老健に移動した。老健では、まず昼食をとり、その後、管理栄養士が嚥下困難食（介護食）の解説と試食を行った。常食ときざみ食、ミキサー食、とろみ食、ゼリー食、ムース食等を、参加者が実際に味わい、形態による味や食感の違いを体験した。次に、理学療法士と介護福祉士が、車椅子、杖、自助具等の介護用品を説明し、参加者が実際に触れて体験した。そして、施設見学で、通所リハビリテーション等の際に使用する介護用送迎車両に車椅子やストレッチャーで乗車体験し、パワーリハビリの体験、特殊浴槽の介助体験、入所利用者のレクリエーションの見学、老健で使用する医療物品等について見学した。そして、各専門職からの講義を行った。内容は、老健の医療について（施設長兼医師）、老健の看護とケアマネジメントについて（看護師兼介護支援専門員）、急変時の対応について（看護師兼介護支援専門員、介護福祉士）、老健の介護について（介護福祉士）、老健のリハビリテーションについて（理学療法士）、老健の相談援助について（支援相談員）であった。最後に、クッキータイムで、老健におけるリハビリテーション・

表1 プログラム当日のスケジュール

時間	内容
9:00-9:30	受付開始
9:30-9:40	開会挨拶、オリエンテーション、科研費と本事業の説明
9:40-10:10	【講義：概要】「ろうけん＝介護老人保健施設」ってどんな所？
10:10-11:00	【演習：高齢者体験】高齢者疑似体験装置を着用し、老化について考えよう
11:00-11:10	休憩
11:10-12:00	老健に移動（貸切バス）
12:00-13:00	【昼食】（研究者、ゲストらと共に老健の研修室で食事）、介護食体験
13:00-14:30	【施設見学：実践】老健の施設見学及びリハビリテーション・レクリエーションに参加
14:30-15:00	【ゲスト講演】老健の医療・リハビリ・看護・介護について
15:00-15:30	【クッキータイム】老健のリハビリ・看護・介護スタッフとフリートーク
15:30-15:40	休憩
14:40-16:30	大学に移動（貸切バス）
16:30-16:50	【講義：まとめ】老健の魅力について考えてみよう
16:50-17:10	【修了式】「未来博士号」授与式
17:10	終了



看護・介護の魅力について、参加者と老健の専門職が話し合った。

### 3) 本学におけるプログラム内容 (2)

再びバスで本学に戻り、「老健の魅力について考えてみよう」と題してまとめの講義を行った。ここでは、老健入所者の気持ちを詩にした、「老健職員さんへ」(作詞:藤原伸二氏 / 島根県老人保健施設「たてがみの郷」介護支援専門員)をPowerPointで映写して、老健利用者の気持ちを考える時間を設けた。その後、参加者がこのプログラムに参加して感じたことを発表した。最後に、本学の新道幸恵学長より「未来博士号」の修了証書が一人ひとりに手渡された。

プログラムの詳細については、表1に示した。

## Ⅲ プログラム実施後の参加者への質問紙調査

### 1. 調査目的

本プログラムの実施内容について参加者の感想や意見を調査し、今後のプログラムのあり方を検討することを目的とした。

### 2. 調査方法

筆者らが独自に作成した質問紙を、全プログラム終了後、学振作成の本事業の質問紙配布時に同時に配布した。質問紙は無記名として、記入後は出口に設置した回収箱で回収した。

#### 1) 調査内容

質問紙の内容は、基本属性、老健と専門職についての事前知識、本プログラムの理解度、老健への興味、専門職への志望、老健での勤務希望、感想や意見について、選択肢(基本属性以外は5段階のリッカート尺度)と自由記載で構成した。

#### 2) 分析方法

調査内容毎に記述統計を算出した。自由記載は内容分析を行った。

#### 3) 倫理的配慮

調査の実施に際しては、質問紙に調査の目的、意義、及び無記名調査であるため、回答者個人が特定されないこと、得られたデータはこの調査目的以外では使用しないこと、調査への参加は自由であること、結果を学会や学術誌等で公表することを明記し、口頭で説明を行った。また、質問紙の提出をもって調査への同意の確認とした。

## 3. 結 果

### 1) 回答者の背景

本調査の回答者は14名(回収率100%)であった。性別は女性13名(92.9%)、男性1名(7.1%)、学年は3年生13名(92.9%)、2年生1名(7.1%)であった。

### 2) 本プログラム参加前の老健・専門職についての事前知識 (図1)

本プログラムに参加する前に、老健について知っていたかについて、「だいたい知っていた」6名(42.9%)、あまり知らなかった5名(35.7%)、どちらともいえない3名(21.4%)であった。「だいたい知っていた」理由についての自由記載では、「テレビで見た」「祖父母が入所や通所サービスを利用していた」「親が老健で勤めている」等であった。

本プログラムに参加する前に、老健の専門職について知っていたかについて、「だいたい知っていた」6名(42.9%)、「どちらともいえない」5名(35.7%)、「あまり知らなかった」3名(21.4%)、であった。

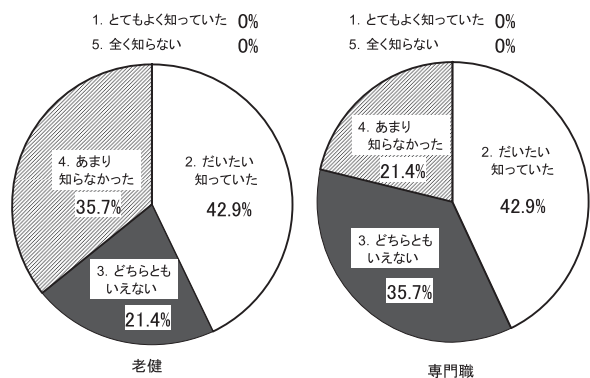


図1 老健・専門職についての事前知識

### 3) 本プログラムの理解度 (図2)

本プログラムの内容について理解できたかについて、「とても理解できた」9名(64.3%)、「だいたい理解できた」4名(28.6%)、「どちらともいえない」1名(7.1%)であった。

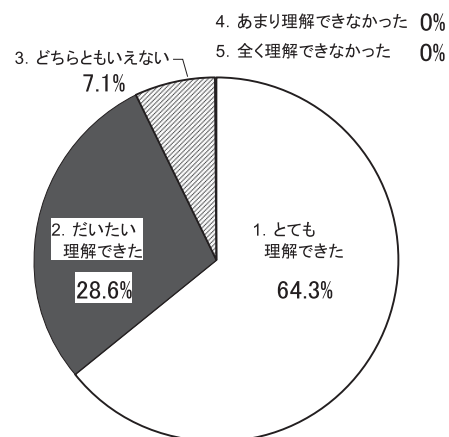


図2 プログラムの理解度



#### 4) 本プログラム参加後の老健への興味 (図3)

本プログラムに参加して老健について興味がわいたかについて、「非常に興味がわいた」11名 (78.6%), 「少し興味がわいた」2名 (14.3%), 「どちらともいえない」1名 (7.1%) であった。

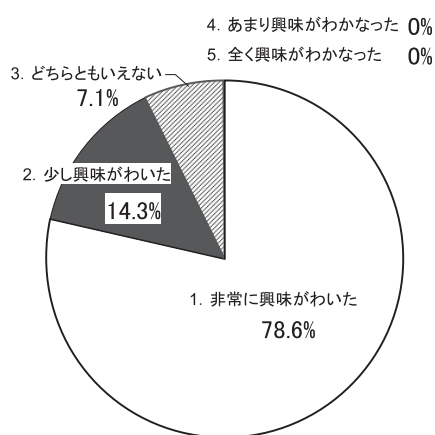


図3 老健への興味の程度

#### 5) 本プログラム参加後の専門職への志望 (図4)

研究者 (大学の教員) からの話を聞いて、将来、専門職 (医療・看護・リハビリ・介護職等) になろうと思ったかについて、「絶対になろうと思った」12名 (85.7%), 「できればなろうと思った」1名 (7.1%), 「どちらともいえない」1名 (7.1%) であった。

老健の専門職からの話を聞いて、将来、専門職 (医療・看護・リハビリ・介護職等) になろうと思ったかについて、「絶対になろうと思った」12名 (85.7%), 「できればなろうと思った」2名 (14.3%) であった。

「絶対になろうと思った」理由についての自由記載では、「魅力が改めて実感できた」「やりがいのある仕事と感じた」「利用者の笑顔がみたい」「大変さの中にも楽しさがあると思った」「利用者のことを理

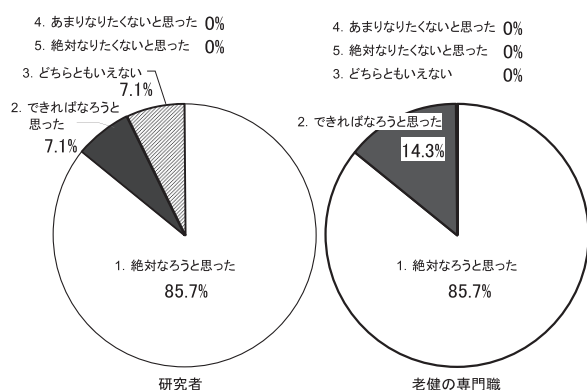


図4 専門職への希望

解できる人になりたいと思えた」等であった。「できればなろうと思った」理由は、「病院ではなかなかない利用者とのふれあいがあると思えた」であった。

#### 6) 本プログラム参加後の老健での勤務希望 (図5)

本プログラムに参加して、将来老健で働きたいと思ったかについて、「できれば働きたい」8名 (57.1%), 「どちらともいえない」3名 (21.4%), 「絶対働きたい」2名 (14.3%), 「あまり働きたくない」1名 (7.1%) であった。

「絶対働きたい」理由についての自由記載では、「利用者も老健職員も楽しそうだった」「小学校から働きたいと思っており、さらに強固な気持ちになった」であった。「できれば働きたい」理由は、「老健もいいが、病院で働きたい」「やりがいのある仕事と思えた」等であった。「あまり働きたくない」理由は、「病院で働く看護師になりたい」であった。

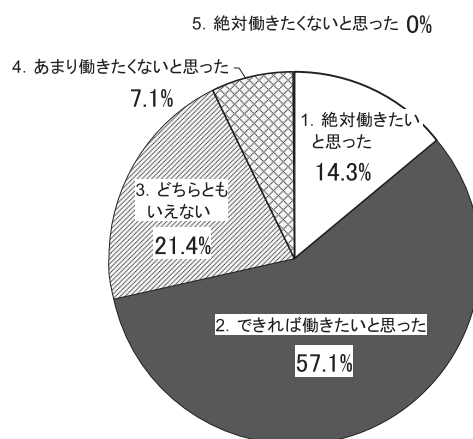


図5 老健での勤務希望

#### 7) 本プログラムについて感想・意見

本プログラムの感想・意見についての自由記載は以下の6点にまとめられた。

##### (1) 看護師志望動機が強固になった

元々看護師希望であった者が、その思いが強くなったことや、改めて強く決意したことが述べられていた。

##### (2) 介護への興味がわいた

看護への興味は既にあった者が、今回このプログラムに参加することにより、介護に対する興味をもったことが述べられていた。

##### (3) 看護・介護専門職への尊敬の気持ち

看護師や介護職員は多くの利用者を個別に理解し接していることに対して、尊敬の念を抱いたことが述べられていた。



#### (4) 嚥下障害のある人への理解

嚥下困難食を試食したことで、普段自分たちが食べている食事が恵まれたものだと知ったことや、嚥下障害のある人の苦痛や苦悩を理解したことが述べられていた。

#### (5) 利用者の気持ちを考えることの大切さ

講義を聞き、演習で実際に自分の体を動かすことで、高齢者や利用者の気持ちを考えることの大切さを学んだことが述べられていた。

#### (6) 介護の大変さを実感

介護は大変ということは聞いていたが、改めてそれを実感したことが述べられていた。

### IV 考 察

#### 1. 本プログラムの実施について

参加者のプログラム参加後の質問紙調査より、本プログラムの内容について「とても理解できた」と「だいたい理解できた」の合計が、90%以上であった。また、自由記載による感想・意見は、ほとんどがポジティブなものであった。従って、参加者にとっては満足度の高いプログラムになったのではないかと考える。これは、プログラムの狙いを達成するために、ただ話を聴くだけの一方向のプログラムではなく、講義と体験を参加者の理解が進むように段階的に組み合わせることに留意、工夫したからと考える。具体的には、まず、大学で、老健の利用者である高齢者の理解のために、講義の他に、演習（高齢者擬似体験）を組み合わせた。そして、実際に老健に行き、見学と演習（嚥下困難食の試食や介護体験）を実施した。そこで実際に医療・リハビリテーション・看護・介護に携わっている専門職から直接話を聴き、意見を交換するという流れで、段階を追って老健のリハビリテーション・看護・介護について理解できるようにした。そのことにより、老健の魅力を探求することができたからではないかと考える。

また、本学の学部2～4年生の4名に実施協力者として協力を得た。彼らは参加した高校生らと年齢が近く、また参加者にとって、近い将来の理想の姿である先輩であり、彼らが気軽に話す場面も作った。例えば、演習の高齢者擬似体験装置の着用の際に、グループ毎に学生を配置し、体験装置の着用の援助やデモンストレーションを実施し、また大学と老健施設までの移動のバスの車中で、コミュニケーションの場を設けた。これらの留意や工夫により、参加者の高校生の興味を引き、学ぶ意欲を高めることができたのではないかと考える。

しかしながら、本プログラムの募集人数20名に対

し、参加者は14名にとどまった。本プログラムの広報活動は、本学採択の同事業のプログラム4件合同でのリーフレット・ポスターを作成し、本学教職員の協力により、近接の高等学校を訪問した際に、本事業についてPRした。また、広島県内の約100施設の老健に、リーフレットを郵送配布してPRを行った。さらに、本学の学報とホームページ、学振のホームページ、地元の廿日市市の広報誌、タウン誌への掲載や、地元新聞、ラジオ、テレビによるPR、それに本学学生の口コミによるPR等、様々な手段により、広く事業を周知した。しかしながら、募集定員に満たなかったことは、開催日程の問題や魅力あるテーマ設定等、改善が必要と考える。日程に関しては、高校生のスケジュールを勘案し、夏休みに開催する等の検討が必要と考える。

#### 2. 本プログラムによる介護人材確保の可能性

近年、介護従事者の賃金水準が低く離職率が高く定着が進まない等、老健をはじめとする介護の現場では、人材確保が困難な状況が続いている（藤原，2009）。特に、介護福祉士養成施設の学生数の減少は著しく、近年の入学者数は、定員の5割を切っている状況であり、必要な介護職員を確保することが困難になってきている（介護老人保健施設における介護職員キャリアアップシステム検討班，2009）。一方、厚生労働省においても、少子高齢化の進行等により、労働力人口が減少し、全産業的に労働力の確保が困難となっていくことが見込まれる中で、限られた労働力の中から、国民のニーズに的確に対応できる質の高い福祉・介護人材を安定的に確保していくことは喫緊の課題であるとして（厚生労働省，2008）、1993年に策定された「社会福祉事業に従事する者の確保を図るための措置に関する基本的な指針」を2007年に見直し、人材確保のための取り組みを改めて整理している。この中で、就職期の若年層から魅力ある仕事として評価・選択されるようにし、さらには従事者の定着の促進を図るための「労働環境の整備の推進」を視点の1つに掲げている（厚生労働省，2007）。つまり、進路選択時期にある若年層を介護の現場に導き（平成20年度実践型人材養成システム普及のための地域モデル事業班，2009）、介護分野が魅力ある仕事として評価されるような取り組みが必要である。そのために、本プログラムのような進路選択時期にある高校生を対象とした老健体験の機会を提供することが有効ではないかと考える。なぜならば、本プログラムの参加者の参加後の質問紙調査において、老健について「非常に興味がわいた」と「少し興味がわいた」の合計が90%以上



あった。また、将来老健で働きたいと思ったかについて、「絶対働きたい」と「できれば働きたい」の合計が70%以上であり、さらに、自由記載で「介護への興味がわいた」という回答があった。つまり、本プログラムのような老健体験のプログラムを高校生に提供することは、介護や老健への関心を引くことになり、進路選択の時期にある高校生にとって、介護分野を進路選択とすることを促進することに繋がり、介護人材確保の一助となるのではないかと考える。

### 3. 本調査の限界と課題

本調査は、本プログラムに参加した高校生を対象とした。本プログラムの参加者は自主的な参加のため、本プログラムに興味のある者であり、その多くが本学への入学希望者であると考えられる。また、約40%の参加者が老健や専門職についての知識があると答えており、参加者の多くが既に老健に興味のある者や看護師志望の者である。また、対象者が14名と限られた人数であるため、結果の一般化は困難である。

一方、介護人材確保の課題は、諸外国も同様である（森川，2009）。我が国においても、2009年度介護報酬改定では、介護従事者の処遇改善に資する内容とすることが必要とされ、介護従事者等の人材確保と処遇改善を目的とした初めてのプラス改定となった（神部，2009）。今後、この介護報酬改定が、介護従事者等の処遇改善にどの程度結びつくのか検証され则认为。加えて、介護人材確保のためには、本プログラムのような、進路選択時期にある高校生を対象とした、介護分野の体験学習等の取り組みが有効と考える。今後は、本プログラムの結果をふまえて、他施設・機関でも同様のプログラムを実施することを働きかけていきたい。その際には、実施のための資金が必要であり、関係諸機関の助成制度等を確立することが課題である。

## V 結 語

高校生を対象とした老健体験プログラムを実施し、今後のプログラムのあり方を検討することを目的に、プログラム終了後に質問紙調査を実施した。その結果、本プログラムの内容について「理解できた」が合計90%以上あり、満足度の高いプログラムと考えられた。また、老健に「興味がわいた」が合計90%以上あり、将来老健で「働きたい」が合計70%以上であった。従って、老健体験のプログラムを高校生に提供することは、介護や老健への関心を引くことになり、進路選択の時期にある高校生に

とって、介護分野を進路選択とすることを促進することに繋がり、介護人材確保の一助となるのではないかと考えた。

## 謝 辞

本プログラム実施に際して、医療法人翠清会介護老人保健施設ひばりの梶川博理事長をはじめ、職員の皆様には企画から運営まで多大なご協力を賜りました。また、高齢者疑似体験装置は、広島県介護予防研修相談センターより拝借致しました。さらに、まとめの講義で使用した詩のPowerPoint ファイルは、医療法人社団長寿会・社会福祉法人共助会の畑野栄治理事長からご提供賜りました。そして、本プログラムの広報活動においては本学の教職員の皆様、また応募から実施後の報告までの事務手続きにおいて、本学経理課を中心に事務局の皆様にご協力賜りました。最後に、未来博士号の授与式では本学の新道幸恵学長にご出席賜りました。皆様に深く感謝申し上げます。

なお、本プログラムの業務完了報告書は、学振のホームページの次のアドレスに掲載されています。

[http://www.jsps.go.jp/hirameki/ht21000\\_jisshi/ht21183.pdf](http://www.jsps.go.jp/hirameki/ht21000_jisshi/ht21183.pdf)

## 文 献

- 独立行政法人日本学術振興会（2009）．ひらめき☆ときめきサイエンス．2009年10月31日，<http://www.jsps.go.jp/hirameki/>
- 藤原朋子（2009）．平成21年度介護報酬改定の概要と今後の高齢者ケアの政策課題について．保健医療科学，58（2），70-77．
- 平成20年度実践型人材養成システム普及のための地域モデル事業班（2009）．平成20年度実践型人材養成システム普及のための地域モデル事業報告書．社団法人全国老人保健施設協会．
- 介護老人保健施設における介護職員キャリアアップシステム検討班（2009）．介護老人保健施設における介護職員キャリアアップシステム導入マニュアル．財団法人介護労働安定センター・社団法人全国老人保健施設協会．
- 神部智司（2009）．2009年度介護報酬改定および要介護認定システム変更のポイントと課題．認知症ケア事例ジャーナル，2（1），26-32．
- 厚生労働省（2008）．政策レポート 福祉・介護人材確保対策について．2009年10月31日，<http://www.mhlw.go.jp/seisaku/09.html>
- 厚生労働省（2007）．社会福祉事業に従事する者の



確保を図るための措置に関する基本的な指針」(平成19年厚生労働省告示第289号). 2009年10月31日,  
<http://www.mhlw.go.jp/bunya/seikatsuhogo/dl/fukusijinzei.pdf>  
森川美絵 (2009). 介護人材の確保育成策 諸外国の経験から. 保健医療科学, 58 (2), 129-135.  
リハビリナース編集部 (2009). Report 「『ろうけん』ってどんな所? リハビリ・看護・介護の

魅力を探求しよう!」. リハビリナース, 2 (6), 102.  
老健編集部 (2009). 今月のトピック「『ろうけん』ってどんな所?」高校生が老健施設で体験学習. 老健 (全国老人保健施設協会機関誌), 20 (8), 80-81.



# Securing Caregivers through a Geriatric Health Services Facility Experience Program Targeting High-School Students

Implemented through research progress dissemination projects based on a Grant-in-Aid for Scientific Research (KAKENHI)

Takeshi HYAKUTA\*<sup>1</sup> Junko OKADA\*<sup>1</sup> Hisako WATANABE\*<sup>1</sup>  
Minako KAJIKAWA\*<sup>2</sup> Etsuko YAMAMOTO\*<sup>2</sup> Jun KANAMEDA\*<sup>2</sup>  
Yuko YOSHITANI\*<sup>2</sup> Aki KUWAHARA\*<sup>2</sup> and Miki UEDA\*<sup>2</sup>

## Abstract:

We implemented a geriatric health services facility experience program targeting high-school students with funding from a Grant-in-Aid for Scientific Research (KAKENHI) from the Japan Society for the Promotion of Science. A questionnaire survey conducted after program completion revealed that over 90% of participants “comprehended” the content of our program, leading to the belief that our program was highly satisfactory. We found that over 90% of participants “developed an interest” in geriatric health, and over 70% of participants “would like to work” in geriatric health in the future. Thus, providing high-school students with a programmatic experience in geriatric health fosters their interest towards nursing care and geriatric health services facilities. We believe that this program can help secure caregivers because it motivates high-school students to choose a career in the nursing field.

## Keywords:

high-school student, Geriatric health services facility, Grant-in-Aid for Scientific Research (KAKENHI)

---

\* 1 Japanese Red Cross Hiroshima College of Nursing \* 2 Geriatric Health Services Facility HIBARI